

○議長（小林哲雄）

一般質問を続けます。5番、前田せつよ議員、どうぞ。

○5番（前田せつよ）

おはようございます。5番議員、前田せつよでございます。通告に従いまして、2項目の質問をさせていただきます。

防災、減災対策のために、路面下の空洞調査を早急に。最近の異常な自然現象は、鬼気迫るものがございます。台風については、過去最大級の到来があり、ゲリラ豪雨による土砂災害など、大きな爪あとを残しました。また、日本は火山の国であることを忘れてはいけないと突きつけられたような、御嶽山などの噴火で、多くの被害を受けました。また、11月22日には、長野県北部を震源とするマグニチュード6.7という地震も発生いたしました。関係各位の皆様には、心よりお見舞いを申し上げるところでございます。

2011年の3.11東日本大震災以降、このような自然現象によって生じた地殻変動で、地下は一体どのような状態になっているのか。その状況を把握して、対策を講ずることが急務であると考えます。今、多くのインフラの老朽化により、路面の下に空洞が生じ、これによって発生する突然の路面陥没の報道を目にする場合が、よくございます。路面下の空洞化現象は、上下水道管の老朽化による漏水や破損、河川や海岸に沿った道路では、老朽化した護岸から水位の変動によって内部の土砂が流出して発生すると考えられております。そのため、路面の下に潜む空洞による陥没の危険性については、事前に把握し、適切な対策を講じていくことが、防災、減災の観点から大変に重要だと言われております。

開成町として、路面下の点検や整備をどのように取り組み、計画をされているのかお伺いをいたします。

壇上での質問は、以上とさせていただきます。

○議長（小林哲雄）

町長。

○町長（府川裕一）

それでは、前田議員のご質問にお答えします。

初めに、路面下空洞調査について説明をいたします。路面下空洞調査としては、路面下の地中にできている空洞箇所を調査するものであり、平成25年度に町で実施をしました路面正常調査では確認できない内容であります。この空洞調査は、現在ではレーダー装置を掲載した車両を走行させて、空洞箇所を発見する非破壊式調査が主流となっております。路面下が空洞になる原因には、路面下に埋設されている上水道管、下水道管、ガス管、排水路管などの漏水により、土砂が流れることによって発生する空洞や、埋設工事時の埋め戻しが適正でなかったことによる空洞、地下水が何らかの影響で土砂を流してしまい陥没することなど、さまざまな原因が考えられます。

このため、国では地域住民の命と暮らしを守る、総合的な老朽化対策及び事前防災・減災対策の取り組みとして、公共施設の長寿命化や維持管理整備に関する調査を

実施し、必要な計画を策定して、安全安心を確保するための施策を講じております。

また、神奈川県では県が定める緊急輸送路の約600キロについて、国の補正予算を利用して、平成25年、26年度の2年間で、ご質問の調査を実施しております。この県事業の中で、開成町の中を通る県道御殿場大井線、松田停車場線、開成小学校付近にある開成中央通りのファミリーマート横交差点から牛島交差点の間が緊急輸送路に認定をされておりますので、この区間が今年度、神奈川県が実施する路面下空洞調査の対象路線となっております。

町内での空洞現象は、過去に町道を横断する水路などの付近に陥没が発生した事例がありますが、発見が早く、新たに路床材などにより埋め戻しを行ったため、大事には至っておりません。これまでの町道補修の経験から、今後短期間のうちに、ご指摘のような突然の道路陥没が町内で発生するおそれがあるとは考えにくい状況にありますので、町では平成25年度に実施した町道路面正常調査をもとに、平成26年度に策定した路面舗装維持整備計画に基づいて、町道路面補修を計画的に実施していきます。

なお、路面下空洞調査については、神奈川県の結果を参考に、今後、調査研究の上で第五次開成町総合計画後期基本計画の中で検討したいと考えております。

以上です。よろしくお願いいたします。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

ただいま一定の答弁をいただきましたので、随時質問をさせていただきます。

まず、初めに有収率についてお尋ねをいたします。路面下の空洞の原因の多くは、上下水道管というような比率が高うございます。その点もございまして、有収率にお尋ねをしたいと思っております。有収率とは、給水する水量と料金として収入のあった水量との比率のことをいう数字でございます。海外の水道事業では、この有収率のことを漏水率という言葉で言われているわけでございます。この有収率の観点から、当町を眺めてみますと、3.11の東日本大震災の前年である平成22年度は94.1%でございました。昨年度、平成25年度は91.3%ということで、2.8%の減が生じているわけでございます。また、平成24年度と比べても1.6%と、年々この有収率というものの数値が下がっているという、この現象について、町としてはどのような捉え方をなさっているのか、お伺いをしたいと思います。

○議長（小林哲雄）

上下水道課長。

○上下水道課長（熊澤勝巳）

議員のご質問にお答えいたします。今、おっしゃられました有収率につきましては、議員のおっしゃるとおり、3.11から比べますと、今年度、平成25年度につきましては91.3%ということで、ご指摘のとおり有収率の部分が下がっております。これにつきましては、やはり上下水道課としましても、漏水というものの原因がある

というふうに認識しております。この結果をもとに、今年度は1回、漏水調査のほうを実施しております。この漏水調査につきましては、7月の土用干しの時期に、水路に水がない時期に、道路の表面では漏水等は路面に漏れているのが見えますけれども、水路の護岸から漏れてくる水というものは、なかなか見つけれないという部分で、土用干しの時期に、水路に水がない時期に、これは目視なんですけれども、エリアを決めた中で、漏水があるかどうかというものを巡回して調査をしております。この巡回につきましては、職員だけではなく管工事組合さん等の協力を得た中で実施しております。この調査につきましては、漏水は発見できなかったということで、実際、違うところで、また漏水等があるのではないかと思いますので、今後その辺の漏水の発見については検討させていただきたいと思っております。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

ただいま、漏水が原因であるというご答弁をいただきました。また、実施時期に関しましては、7月の土用干し、そして作業工程としては目視という、このフレーズが出てきたわけですが、やはり目視という部分と、それから期間が7月でなければわからないという、この限定された中で、どれだけの信ぴょう性があるか、この漏水の点検ができるのか。また、危機管理の上からも、このような調査の仕方というのはいかがなものかというふうに考えるところでございますが、いかがでございましょうか。

○議長（小林哲雄）

上下水道課長。

○上下水道課長（熊澤勝巳）

漏水の調査につきましては、機械を使った調査等ありますけれども、実際、町のほうで持っております器具につきましては、簡易な器具しか今、持っておりません。最初に、どういう形の中で調査をしていくかという中では、職員のほうで現場を歩きながら目視をして、調査させていただいています。これに基づいて、今回、漏水箇所の発見がありませんでした。今後、どういう調査をしていけばいいかということについては検討していき、必要があれば業者へ委託、また装置を使った漏水調査というものを検討していきたいと思っております。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

必要とあれば業者にというようなお話が出てきたわけですが、実は今回質問をさせていただくに当たりまして、11月に第6回のインフラ検査維持管理展というのが東京ビッグサイトで行われまして、関係する業者が大勢出展していたところに、私も勉強で行かせていただきました。その中で数社、路面下の空洞調査をされる業者を見学したわけですが、調査をするに当たって、道路を遮断したりとか、そ

うというような誘導要員の方を使わずに、ただ普通に車を60キロで走らせながら、マイクロ波を使って一時期に全てがわかるというような高性能な調査も、今はやっているような業者も多々あるようでございますので、ぜひその辺のことを取り入れてみてはいかがかと思えますけれども、ご答弁いかがでしょうか。

○議長（小林哲雄）

上下水道課長。

○上下水道課長（熊澤勝巳）

ご質問にお答えします。議員のおっしゃった調査というのは、漏水ではなくて、やはり空洞を発見する調査だと思われれます。上下水道課で考えます漏水調査といいますと、やはり水道管から水が漏れている箇所を発見するというので、そのところで空洞が発生しているかという部分につきまして、またちょっと考えが違いますので、漏水があって空洞があるという部分ではなく、空洞のないところでも漏水はしていますので、その辺では、そういう空洞調査よりは、やはり漏水があるかどうかというもので、専門的なそういう調査があれば、そういうものを採用していきたいなと思っております。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

実は、ただいま紹介した業者は、マイクロ波で全ての管、先ほどご紹介にありました下水道管から始まり、ガス管から始まり、全ての管の内部まで細部にわたって見るところでございまして、空洞はもとより地層を断面的に切ったような、いわゆるバウムクーヘンみたいな状態の中から、鮮明にその内部までわかることなので、空洞調査にかかわらず、その漏水に関するところまで網羅できるような調査だということで体験画像も見てきたわけでございますので、ぜひその点も踏まえた形で考えていただければありがたいかなというふうに思うところでございます。

次に、本年6月の本会議の同僚議員の質問に対して、町の答弁で、水道管について、40年以上経過したものが2.3キロあるというようなご答弁をいただいたわけでございますが、耐用年数を過ぎていると把握されたわけなんです、その管の調査の仕方というのは、確か水を流しながら調査をするのが主流になっているような形でございますが、その2.3キロの耐用年数の把握というのも、どのような形でなされたのか、そのことについてもお示し願えたらというふうに思います。

○議長（小林哲雄）

上下水道課長。

○上下水道課長（熊澤勝巳）

水道管の40年を超えた管につきましては、議員ご指摘のとおり約2.3キロございます。こちらの管の把握といいますと、上下水道、特に上水、下水ともに、管の台帳というものを整備しております。こちらの台帳の中で、いつ配管したのかという部分が明確になっておりますので、そちらの配管時期というものを確認した中で、そこ

の管、ある区間の管が40年過ぎたという部分の、まず場所と、その管の距離というものを把握しております。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

それでは、あくまでも、今のご答弁ですと、台帳を見た中でそれを把握して、それを実際に、耐用年数に相当した形で、それが40年経過しているので気をつけなければいけないというような形で、台帳とともに、そのような形で調査をされているということによろしいでしょうか。

○議長（小林哲雄）

上下水道課長。

○上下水道課長（熊澤勝巳）

漏水の調査という部分では、古い管の部分というのは、まだ実施していないと。先ほど申しましたように目視の調査ということですが。配管の古い、40年を過ぎた箇所につきましては、やはり台帳を見て、台帳の中で、その配管箇所というものも明確になっておりますので、そこで把握をしております。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

実は2013年1月11日に、国は地域住民の命と暮らしを守る総合的な対策のために、事前防災、減災の対策の取り組みをされて、老朽化対策として、閣議決定をしたわけですが、その中で路面下空洞調査を交付金で実施する方針が、そこで決まったわけですが。防災、減災の視点から、総点検を開始する動きになりまして、全国的に広がっているというような状況下であるわけですが、近隣を見てみますと、平塚市と茅ヶ崎市が協力して、この路面下空洞調査を実施したばかりでございます。また、先ごろでは、小田原市でも9月の補正予算で路面下の空洞調査を行うことになったと聞いております。隣接の行政でもございます小田原市の実施でございます。町長、この機会を、せっかく道路はつながっております。この小田原市が実施しているという、この機会をうちの町も逃さずに、同時に開催することで予算の軽減を図って、第五次総合計画の後期というのではなくて、路面下空洞調査を早急に予算の軽減を図りながら、小田原市さんとともにやっていくというようなお考えはございませんでしょうか。

○議長（小林哲雄）

まちづくり部長。

○まちづくり部長（芳山 忠）

すみません、私のほうから答弁させていただきます。

最初に、前提でございますけれども、いわゆる有収率の問題、これについて7～8%も漏水しているというようなお話でございますけれども、これはいわゆる有収率との

差が、全て原因が漏水であるというのは、前提としてはちょっと異なっているのかなと。それ以外の原因も当然ございますので、それが全て漏水によるものであるというような結論は、ちょっと事実とは異なるのではないかとということが、まず一つございます。その辺につきましては、計量の問題もございますので、あるいはまた試験放水、あるいはそれ以外のカウントされない水の量というものもございますので、その辺もご理解いただきたいと思います。

それと、本町につきましては、先ほども町長の答弁でもございましたとおり、これまでの経験値的なところでございますけれども、そういった上下水道管が原因となったような大きな漏水の事例というものが無いと。それに伴う道路の陥没は、今のところ起きた事例がないということで、基本的に、そういった大きな漏水が起き、しかもそれによって道路が陥没する可能性というのは、町長答弁にもございましたとおり、短期的、中期的に考えられるということは、なかなかちょっと難しいだろうということがあります。これは、地層的な問題もあるのではないかと、今、手元にそういった資料があるわけではございませんけれども、そういったところもあるのではないかと考えます。

したがって、前田議員ご指摘の、例えば茅ヶ崎市、あるいは平塚市、あるいは小田原市、具体的にどこをどういうふうに調査しているのかということ、ちょっと手元に資料がございませんが、いわゆる海岸地帯の脆弱な地層にあるところと本町とは、一体的に考えることはできないのではないかとこのように考えております。

したがって、私どもといたしましては、今後の計画の中で、当然この路面空洞化調査というのでも国庫補助対象事業でございますので、全くやらないというふうに申し上げているわけではなくて、後期の基本計画の中で検討、調査をしていきたいというふうに答弁をさせていただいているところでございます。それよりも、現在、既に国庫補助対象事業として行っております路面正常調査によりまして、実際かなり町民の皆様にもご迷惑をおかけしております路面の改修工事のほうを優先していきたいところを、現実的にとってまいりたいというふうに考えております。

以上でございます。

○議長（小林哲雄）

町長。

○町長（府川裕一）

基本的に、今、部長がお答えしましたけど、小田原市が今やっているから、開成町も地続きなんですよという話なんですけれども、小田原市は過去に確か相当大的な漏水事故を起こした、小田急線の下をまたぐということだったと記憶しているんですけれども、そういうのがあって自発的に、やはり20万都市ですので、その辺をやっていくということになっていくと思うんですけれども。開成町の場合は、先ほど部長が言われたように、まず路面調査、性状調査をやりましたので、そこを先に、優先的にやっていくと。開成町の中でも、県道部分は県がちゃんと空洞調査をやるということになっておりますので、その結果をもとに、開成町の町道については後期計画の中に盛り

込んで、順次、国の補助金が取れ次第やっていくという形で、計画を進めていきたいと考えております。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

県がやるので、うちの町としては、町第五次総合計画の後期の基本でというようなお話をいただいたわけでございます。ただ、その中で、また部長のほうからも、過去の経験値のお話がありました。最初、通告の中でお話いたしましたように、地下の内部がどのようになっているかわかりませんし、想定外という言葉が、まさしくこの中で、私も答弁を伺いながら聞いてきたわけでございます。やらないわけではないというお話でございましたので、なるべく町民の安全安心のために、道路補修の過去の経験だけでは、確かな予測というのは、事前の補修などは無理なことだというふうに考えます。したがって、新しい調査技術を採用しながら、なるべく早い時期に道路の下の空洞調査に取り組んでいただけるように期待をいたしまして、1項目目の質問を終了とさせていただきます。

次に、2項目目の質問をさせていただきます。公共施設内トイレにおける節水と設備改善を。家、学校、会社などの日常生活で使われる水は、生活用水と呼ばれております。一人が1日使う生活用水は、40年前に比べて2倍近くに増えているという発表が2011年、国土交通省水資源部からございました。日本人女性は、特有のたしなみといわれるもので、トイレでの音消しというような行動パターンをとっております。ほとんどの人が、羞恥心から水を二度以上流して利用している現実がございます。そこで、女子トイレを使用するときの音を消すための設備を施すことは、多量の節水、エコとなりまして、大変に有効な施策と考えます。

開成町の公共施設には、和式トイレが数多く設置されています。例えば、町民センターにおいて、行事が開催されてトイレ休憩になると、洋式トイレがあくのを待つ方々の列の横で、和式トイレはぼかっとならんでいるというような光景を目にする場合がございます。その理由といたしましては、使いたくても足や腰に持病があるので使えないとの声や、親子連れのお母さんからは子どもが和式は嫌がって使いませんとの声も聞くところでございます。そこで、次の3項目について、ご質問をいたします。

1、女子トイレに擬音装置で節水を図ってみてはいかがでしょうか。2、トイレで手を洗う蛇口を自動センサーに改良し、節水、エコに取り組んでみてはいかがでしょうか。3、既存の和式トイレを洋式トイレにしていく考えはいかがでしょうか。

以上、2項目目の質問、よろしくお願いをいたします。

○議長（小林哲雄）

町長。

○町長（府川裕一）

それでは、前田議員の2項目目について、お答えします。

国土交通省水管理・国土保全局水資源部の発表によれば、生活用水や工業用水は、

1960年代半ばから2000年までの間に、約3倍に増加をしました。近年、生活用水の使用料は横ばいとなっているところでもあります。家庭で使用される水を家庭用水、オフィス、ホテル、飲食店等で使用される水を都市活動用水、これらをあわせて生活用水と呼んでおります。生活用水の、1人、1日当たりの使用量は、水洗便所の普及などの生活様式の変化に伴い、1965年から2000年までの間に約2倍に増加し、この間の人口の増加や経済活動の拡大と相まって、生活用水の使用量は約3倍に増加したものの、1998年ごろをピークに、緩やかに減少傾向になっていると発表されております。また、2006年の東京都水道局の調査によると、家庭用水の使い方は、トイレが約28%、お風呂が約24%、炊事が約23%、洗濯が約16%といった洗浄を目的とするものが大部分を占めているとの結果が発表されております。

それでは、1点目の女子トイレに擬音装置で節水を図ってはということですが、擬音装置とは、トイレ内の発生する音をマスキングする目的で、人工的により大きな音を発生させる装置であり、音を恥ずかしがることによるたしなみ、音消しの習慣は国民性の違いにより、欧米をはじめとする諸外国には見受けられないことから、このような装置は日本にしかないとされております。この件につきましては、過去にも女性職員等から同様の提案がありましたが、当時は1機当たり1万円以上するような商品だったことから、導入を見送ったという経過もあります。現在は、2,000円程度で購入できるようになっておりますので、試験的に導入し、職員を中心としモニタリングをした上で効果を検証し、完全導入の可否について判断をしていきたいと考えております。

次に、2点目のトイレで手を洗う蛇口を自動センサーに改良して節水をということですが、センサーによって人の手を感知し、水洗の開閉をするセンサー型手洗い蛇口は、不特定多数の人がトイレや、その洗面所を使う公共の場では衛生的にもすぐれ、蛇口の閉め忘れによる水のむだを大幅に防ぐ効果もあると考えられます。生活の中で水を使う場面を考えますと、洗っているときだけではなく、せっけんを探している間やせっけんを置く間、次の人に順番を譲るときなど、手を洗っていないときも水が流しっ放しになっていることが多いという現実もあります。また、水を流しっ放しにしてはいけないと思いながらも、手が使えないため、動作の途中で蛇口を閉めることができず、結果、流しっ放しにするしかないという場面も多くあります。これらの解決に、センサー型手洗い蛇口は有効であると考えられます。具体的には、既存の手動式手洗い蛇口の修繕や交換が必要になったときに、その用途を考慮した上で、センサー型手洗い蛇口の設置を検討したいと考えております。

最後に3点目の、既存の和式トイレを洋式トイレについて、お答えします。大手トイレメーカーの広報部に取材した記事によると、便器の出荷比率は1960年代は和式が約8割だったものが、1976年に和式、洋式が半分ずつになり、1980年代に急速に洋式の比率が高まり、1980年代後半には約8割が洋式になったとされ、その後も徐々に洋式の比率が高くなり、2000年代に入ると9割以上が洋式になり、現在では住宅の新築、改修は、ほぼ100%洋式とのことであります。一方で、洋式

が主流となった現在でも、外出先では和式を好む方もいることから、駅やデパートなど、不特定多数の方がトイレを利用される場所では、お客様へのサービスとして和式と洋式の両方を設置している場合が多いとのことであります。

ただし、このような複数の個室があるトイレの場合、昔は一つだけ洋式だったのが、現在は一つだけ和式と、比率が逆転しているトイレが多くなっているのが現実だそうであり、これについては、年々洋式を受け入れる方が増えているのは事実ですが、他人が座った便器に座るのが生理的にだめな方も、まだ多いと分析をしております。現在、役場庁舎をはじめとする町の公共施設においては、洋式、和式が併設されているケースがほとんどであり、それぞれの趣味嗜好に合わせて利用されているものと考えております。時代の流れにより、洋式を利用される方が増えているという事実は認識をしているところでありますので、今後はリフォームを含む修繕や交換が必要になったときに、利用者のご意見を踏まえた上で、洋式トイレへの転換及び設置を検討していきたいと考えております。

以上です。よろしくお願いたします。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

日本人女性のトイレに関する意識調査を、ちょっとご紹介したいと思います。40%の人が排せつ音が気になると答え、約90%の女性がトイレで水を2回以上流すとの結果でございました。どうして2回以上水を流すのかという質問に対しては、95%の方が音を消すためというふうに答えていたそうでございます。

実は、開成町の11月の庁舎内及び町民センター、保健センター内で勤務する女性の職員は、約40名いらっしゃいました。その9割の人が2回以上流すということで、9割の方ということだと36人になりますが、その方が1回におおむね3回水を流しますと、108回流すと。そして、音消しのためだけに1日72回流するというような試算が出るわけでございます。町庁舎内のトイレの形態を見ますと、少なく見積もっても1回の流量は10リットルといたしますと、掛ける72回ということで720リットル、1日に720リットルが音消しのために使われている庁舎内でございます。これは、2リットルのペットボトルが360本、毎日毎日、音消しのために水が流れているという計算になります。

また、公共施設の学校トイレの節水について、インターネットで紹介されておりました一例を申し上げますと、鳥取県の教育委員会の2009年の発表によりますと、鳥取市内の高校23校を対象に、女子トイレに擬音装置を設置したところ、年間合計で340万円も削減ができた。ある高校では、前年度比率25%の減になったというような情報もございます。

今後、職員を中心にモニタリングをして云々というような答弁をいただいたわけですが、このような事例を鑑みますと、なるべく早目に導入の計画をつくっていただいて、実施していただきたいというふうに考えますが、いかがでございませ

うか。

○議長（小林哲雄）

財務課長。

○財務課長（田中栄之）

それでは、お答えをしたいと思います。今般、このご質問をいただきまして、私のほうも、できる限り女子職員のご意見というのを伺いするようにしました。その中で多かったのは、トイレに入ったときにお一人であれば、割と流さないという方が多くて、隣にもどなたかが入っている場合には、確かに二度流しをするというようなこともありましたので、先ほどの数値がそのまま当てはまるかどうかということは、少し難しいところもありますけれども。

ちなみに、開成町役場庁舎の年間の水道の使用量としては729立方メートルということになってございます。こういった事務所の場合は、約7割がトイレに使われているというふうに言われてございますので、金額でおおむね4万130円ですね。リットルでいいますと、511立方メートルぐらいがトイレとして使われているのではないかとということで、そのうちの女性の比率、あるいはそれが2回、3回流すということを考えますと、議員ご指摘のとおり、それなりの効果はあるということでございますので、まずつけさせていただきまして、使い勝手をモニタリングさせていただいて、今後、普及に努めていきたいというふうに考えてございます。以上です。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

その、つけさせていただいてモニタリングを早速ということで、時期的にはいつごろになりますでしょうか。

○議長（小林哲雄）

財務課長。

○財務課長（田中栄之）

先ほど、答弁の中にもございましたとおり、2,000円程度で購入できるということで、今のところ5～10個程度ご用意してということですから、在庫があれば、予備費等を使って購入をして、早々に対応していきたいというふうに考えてございます。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

ありがとうございました。予備費があればということで。町民センター、保健センター並びに、この庁舎内のトイレ数を鑑みまして、やはり10個程度、10数個、まず設置していただければ、庁舎内での調査並びに検証がなされるものと期待をしております。そして、またそれが町隅々に広がっていくことを期待して、早速の対応をお願いしたいと思います。

次に、②としてトイレで手を使う蛇口を自動センサーに改良して、節水をしてみてはという質問についてでございます。この蛇口につきましても、もちろん節水効果もあるわけですが、それと同時に、このセンサー方式というのは、水の流れを利用して発電した電力を蓄電させて自己発電で、作動するための電源が不要になるというようなこともございます。また、トイレの個室での細菌の繁殖率というのが、床よりも蛇口付近は極端に細菌が繁殖しているというようなデータも、そこかしこで掲載をされている現実がございますので、この点について、もう少し効果も含めた中で、この交換が必要になったときにセンサー型手洗い蛇口をとるのではなくて、節水と、それから安全性、細菌を削除する、また細菌がなるべくないような形で、また今の時期、インフルエンザ等云々もございますので、もう少し早い形でのセンサー型手洗い蛇口の設置についての導入のお考えはいかがでございましょうか。

○議長（小林哲雄）

財務課長。

○財務課長（田中栄之）

それでは、お答えをさせていただきます。議員ご指摘のとおり、節水目的以外に衛生ということで町長の答弁にもございました。確かにおっしゃるとおり、今すぐに全部取りかえられれば、それにこしたことはないわけですが、現状に十分使えている蛇口がありますので、衛生面等の管理を徹底していく中で、細菌の発生等は抑えられるというふうに考えてございますので、すぐにとということでは、残念ながら現時点では考えておりません。以上です。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

また、それでは町民の声を聞きながら、適宜その辺の蛇口についても視点を持った形で対応していただければありがたいというふうに思うところでございます。

3項目目の、既存の和式トイレを洋式トイレにしていく考えについて、お伺いをいたします。開成町の公共施設における和式、洋式の比率は、かなり和式のほうが多く見受けられる施設もあるところでございますが、南部コミュニティセンターに限りましては、洋式トイレが一つもないと。和式のみというような現状がございまして、この点、いかがお考えになりますでしょうか。

○議長（小林哲雄）

教育総務課長。

○教育総務課長（橋本健一郎）

では、ご質問にお答えしたいと思います。議員ご指摘のとおり、南部コミュニティセンターにつきましては、今現在、洋式トイレはないような状況でございます。今現在、数で申しますと、女性は和式が2器、男性のほうが1器ということで、合計としても3器しかないわけですが、こちらにつきましては、現在、昼間ですと幼稚園など、のびのびルームですとか、あと夕方以降は学童のほうでも使っておりまして、

そちらの利用者から、実際のところ改修してほしいというような要望もございますので、そこにつきましては、そのような方向で検討を進めていきたいというふうに考えているところでございます。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

今、ご答弁いただいたように、私もやはり幼稚園、また放課後児童クラブに通っている保護者の方等々から、同じような形で強い要望があったところでございますが、具体的にどのような形で、いつごろまでを目途にした形で検討をし、計画していくのかという、もう一步進んだ形でのご答弁を頂戴したいと思います。

○議長（小林哲雄）

教育総務課長。

○教育総務課長（橋本健一郎）

では、お答えしたいと思います。それら、声をいただいた件もございまして、今回、平成27年度の予算要求では一応計上しているところでございますけれども、まだ予算が確立しておりませんので、そのほか査定等がございますので、ちょっとその辺は保証できませんけれども、事務方としては予算要求をしているような状況でございます。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

それでは、予算要求の中でまた対応させていただく形で、それが実現にいきますように、私もしっかりやっていきたいなというふうに、審議したいなというふうに思うところでございます。

実は、文命中学校に目をやりますと、やはりトイレの数といたしましては、女子用のトイレが中学校内で21、和式が8というような数のお示しがあるところでございますが、実は2010年度の学校のトイレ研究会というもののアンケートの実施の中で、トイレについて、全洋式化にかじを取る自治体が、もう急速に増えつつあるというような、極端な締めくくりの文章があったわけでございますが、その中で、やはり子どもたちにとって、トイレが大変に重要な場面であるような内容もあったわけでございます。この文命中学校の和式、洋式のトイレの比率を鑑みながら、文命中のトイレの現状について、どのようにお考えかお聞かせ願いたいと思います。

○議長（小林哲雄）

教育総務課長。

○教育総務課長（橋本健一郎）

では、ご質問にお答えしたいと思います。別添の資料にございますとおり、文命中学校の助成につきましては、洋式が21器、和式が8器ということになってございます。こちらにつきましては、既に洋式への改修を終えたと教育委員会では捉えており

ます。先ほども町長の答弁にございましたとおり、やはり洋式ですと、前の方が使った後に使うということで、生理的にやっぱり受け付けないという生徒等もおりますので、全部洋式にするという考えはございません。そういうことで、男子のトイレにつきましても、2器あるうちの1器は洋式、1器は和式という形で、整備をしているところでございます。これにつきましては、各小学校でも、幼稚園でも同じような形で和式は残して、整備をしておりますので、教育委員会としては既に洋式トイレの対応については対応済みというところで考えているところでございます。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

確かに、全部洋式というのは極論であるのだなというふうに私も考えるところでございますが、そのことが原因なのかわかりませんが、文命中学校の、特に2年生のトイレのフロアでは、大変に混雑したりとか、そのフロアを通り越して別の建物のトイレに行くというような姿を見かけた状況がございましたが、その点について、教育委員会のほうで状況把握等々されているのであれば、お聞かせください。

○議長（小林哲雄）

教育長。

○教育長（鳥海 均）

トイレの問題につきましては、50分の授業が終わってすぐ、全員が同じようにトイレにさっさと行って、全員が5分で戻れるというような施設があれば、これは一番いいことだというふうに思います。しかし、なかなか施設をつくるに当たって、以前は文中も600人いたわけで、その時代でもトイレの問題はどうかという過去のことをひも解いてみると、余りトイレについての問題はなかった。ただ、和式、洋式については、現在、課長がお答えしたように比率としてそのぐらいがいいだろうという形で設置をしました。今、議員ご指摘のとおり、近いトイレに行かないで、なぜ遠い所に行っているのか。これは生徒指導上の問題がありまして、学年ごとにトイレを使うという学校の校長を中心とした生徒指導の基本としてそう考えていたわけで、若干使いことについては不便があるけれども、生徒指導上、学年単位で決めるという学校の方針でやっておりますので、ご理解をしていただきたいというふうに思います。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

今、教育長から指導上も含めた形で、そのようなトイレの使用状況にあるということで、具体的には2年A組が、そのフロアのトイレを使わないで、隣接しております特別教室があります建物のほうまで、おおむね100メートルぐらいを歩いて用を足して戻ってくるというような状況下にあるわけで、1クラスがそのような片道100メートル近く歩いてトイレに行き帰ってくる。また、休み時間が10分という中では、なかなか厳しいのではないかなというふうに、気になるところでございますが、

教育指導の一環ということの中でのご答弁であったわけですが、その点、1点、どのように考えられるか。かなり細かな質問ですが、いかがでございましょう。

○議長（小林哲雄）

教育長。

○教育長（鳥海 均）

極力どのトイレでも、誰でも使えるような人間関係を確立して、子どもたちが楽しく学校生活を送れるように、校長含めて指導していきたいというふうに思います。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

ありがとうございました。現在、文命中学校は508名という中で、なかなか自分のフロアではない所のトイレに行ったりとかということで、先生方もご苦労されている状況も、また女性の先生方もトイレ待ちをするような状況があるようなことも耳にしているところでございます。人口増加ということで、大変うれしい開成町ではございますが、その中で細々目を向けてみますと、そういうような状況の中で指導をなさっているということで、大変だなというふうに思うところでございます。

トイレに関しても、今、教育長、答弁いただいた形で、どこでも誰でも気軽にトイレに行けるような環境づくりをしていただけるというお話でございました。トイレに関して考えますと、もちろん和式、洋式という部分を今回取り上げさせていただいたのは、やはり今現在、居心地のよい個室というような考えで、今回答弁をさせていただいたわけですが、トイレのありようについて、町長、何か思い入れがございましたらお聞かせいただきたいなというふうに思います。

○議長（小林哲雄）

昨日も言ったんですが、町長に聞くときに最初に振っていただかないと、最後に聞いても大変答え困ると思いますので。

○5番（前田せつよ）

はい。

○議長（小林哲雄）

今回どうですか。

○5番（前田せつよ）

それでは、もう少し。町長の場合は、日本一開成町をきれいとか、いろんなフレーズの中で、トイレというのは、やはり町の玄関口でもあると思うわけですね。だから、そういう感覚からトイレに対して、町長は女性ではございませんけれども、トイレに関して、公共施設の中の整備等々の考えの中でのイメージ等々あれば、お聞かせ願いたいなと、せっかくの機会でございます。

○議長（小林哲雄）

町長。

○町長（府川裕一）

個別の話じゃなくて、トイレというところは本当にすごく大事な場所だと思っています。それを、機械的にきれいにする部分と、今あるトイレをいかにきれいに維持管理するかということで、一部の民間企業の皆さんが開成駅とか文命中学校にも行っていただいて、トイレ掃除をしていただいているボランティアの方もいらっしゃる。あじさい祭に行けば、あじさい公園のトイレを、毎日朝、清掃をしていただいていると。そういった中で、そういう姿を見て子どもたちも、トイレの使い方も含めて、いろいろ考えさせていただいている部分あるのかなと、そういう部分において、教育の面において、施設の面だけではなくて、トイレの使用の仕方、また維持管理、清掃の仕方、そういうところにももう少し力も入れていく必要があるのかなと。

新しくこれからつくっていくトイレ、また公共のこの役場の施設も建て替えを今、検討しているわけですから。そういうときには洋式のトイレで、水洗の音、自動で水が出る、含めて、全部そういうふうな形で入れかえていくことになりますけれども、既存の施設のあるトイレをいきなり改修というわけにはいきませんので、これは順次、壊れたりしたときには洋式に変えるなり、水道の蛇口も自動式に変えるなり、そういうふうな順番でやっていきたいと思っていますので。トイレのあり方というのは重要だというふうな認識はしておりますので、ご理解いただきたいと思います。

○議長（小林哲雄）

前田議員。

○5番（前田せつよ）

順次、そのような形で、トイレについても目線を向けてやっていただけるというところでございました。今回、公共施設内トイレにおける節水と設備改善のこの質問をするに当たりました、日本トレイ協会というところに行かせていただいて、お話を聞いてまいりました。その中で、やはり開口一番おっしゃったのは、公共施設内におけるトイレというのは、まさしくロビーですというふうなお話をされてきました。さまざま、トイレに関しての意識改革を常々持ちながら、また行政運営に図っていただけることを期待いたしまして、私の質問を終わりにさせていただきます。

○議長（小林哲雄）

暫時休憩といたします。再開を10時55分とします。

午前10時40分